由、當地にて櫻の皮を以て製したる短冊を賣りし由なれども今は絶てなし。

鐵器　古は鍛冶町とて鍛工多く住み、中にも兼吉孫六兼重などいふものありしが、次第に衰へ今は殆んど廢絶せり、此孫六は昔名工を以て稱せられし關の孫六が後裔なりしと云ふ、損軒の記には小刃、庖丁、錐、鉈、鎌、ちんわり農具等色々あり、但小刀は下品なりと見ゆ、寶永の頃は盛なりし由なり。

挽物　損軒の記に木を用ゐ轆轤にて挽きて薄く作る色々の器物多し、薄き物の譬へに有馬の挽物と云へり、物の譬へにいふ程なれば必盛に出せしなるべけれど今は絶てなし、偶舊家に傳ふる所の塗りたる鏇器を見るに欅材を薄く挽きたるは如何にも手際なるものなり、古は此地の年寄役專有の職にせしと云ひ傳ふ。

菅笠　有馬菅笠とて萬葉の古歌にも詠まれたる名產なるに、今は作るものなし、有馬の北平田村に菅の岡の名を殘すのみ。

湯の花　炭酸泉及び花の湯等に沈澱する酸化鐵粉なり、古より湯の花と稱し瘡藥として一の名產となり四方に出す、明治十五年は產額金貳拾四圓なりしが、各地溫泉の効能を知り湯の花を溶解して浴湯に投じ、有馬溫泉湯の花と稱し、漸次需用者多し、故に大正元年には貳千七百八拾九圓にして、大正二年には貳千五百拾九圓を產出す。

湯染木綿　綿布を溫泉に浸し黃褐色に染め揚げしものにて、之を以て腹を卷けば暖まるとて浴客多くみやげものにす、近年は纈り又は楓の形を白く染め抜きたるものを製し、又川上藤兵衞と云ふ者落葉山の楓葉を採りこれを打込みにしたるものを新製し、專賣特許を得たり、凡ての賣高は一ヶ年二十反程なり。

湯染楊枝　是も楊枝を溫泉にて染めしものにて土產物にす、養生によろし。

湯の花豆腐　之れは豆腐にはあらず、雞卵にて製したる一種の食物なり、其製法は鰹節と昆布の出汁を作り

夫れに雞卵を和して摺りませさて、小許の麵粉を加へて之を蒸し揚げたるなり、故に其樣黃色なる絹漉豆腐の如く、又湯の花の色に似たるを以て此名あり、鉢に盛りたる儘蒸して出すを匙にすくひ、取りて食ふに滓渣を殘さず頗る佳味なり、柳亭種彥が此湯の花を賞し雅文あり。

名產湯の花を賞す　辭

延喜式にさへ載せられたる、古き溫泉の場所なれば、勝地も多く名產も不寡ありまの湯の花は、瘡の藥に奇効あり、夫とこれとは異なれど形の似たる所より、湯の花の名を負はしたる、雞卵蒸しの美味なるは有明櫻の景色に優りて四季を嫌はず、磁器に咲かせ酒にも飯にも口に適ひ、舌の皷が瀧布ほどに鳴る、評判はこの地の不二を低しとするに至らんかし。

荷にならでよい名物の糸と竹それより輕い湯の花の味　二世　柳亭種彥

越天樂　山谷に自生する欵冬の莖を日に乾かし、蕃椒をまじへ煮しめたるものにて、東京にては伽羅欵冬といふものに同し、これを越天樂といふは烏丸光廣卿入湯の時名づけ給ひしとなり、或は舒明帝御入浴の時これを供御に進め奉りしに其時越天樂の樂を奏せしにより、遂に此名を命ぜりともいへり。大正二年の產額千百五十圓なり

花山椒　眞に花のみにはあらず未熟の實をも共に煮たるものなり、風味よし山椒は皷が瀧の上の方に多く自生す、又其樹の內皮を取りて細粉し煮たるものを辛皮にて共にひさぐ、大正二年產額價格四百四圓八十錢

菌　松蕈は有馬の諸山に菌集して生ず、大抵は九月末より十一月中頃迄を盛りとす、其季節に至れば大阪、兵庫、神戶等より老若男女入湯を兼ねて蕈狩に來る者多く、松蕈の爲めに溫泉の繁華を來す、產額凡四千圓餘もありと云ふ、尙しめぢ、かうたけ、はつたけ等も繁生するを以て汽車の開通の曉は更に群集するならん。

竹　江南竹、紫竹、淡竹、人面竹等もあれども苦竹多し、これ竹細工には專ら苦竹を用いればなり、隨つて筍また多し。

因みに云、湯山近傍には竹籔甚だ多く、筍の產するもの夥しき事なれば、中には培養の届かずして立枯れとなれるもあり、又培養に心を用ゐるものは、筍の初めて地を抽くとき其側に筍と同寸なる葭を立て置き、一兩日を經て之を見るに成長宜しきものは其丈け葭なとよりも遙かに上まで伸び、性質弱きものは依然として伸びざるを以て成長の見込なしとして之を掘り取り、筍の儘販賣し利を得るなり、是れ最も良法と思はるれば爰に記す。

炭酸煎餅　炭酸水を原料として、尙數種の滋養成分を加味調和して製造したるものなり、風味淡泊滋養成分も亦富饒、殊に消化を促し衞生上大方の喝采を博し、進物用其他土產用として好適當品なり。

人形筆　人形筆の濫觴は、往古人皇三十五代舒明天皇の皇后寶皇女に御子ましまさざるを嘆かせ給ひ、帝に從ひ有馬に行啓ましませしかば、程なく皇子御降誕在らせらる、因て御名を有間皇子と命けさせ給ふ、其後人皇三十七代孝德天皇三年冬十月御入湯有せらる、有間溫泉は子を儲るに功能ありとのたまはる、其後永祿二年當地川上と云ふ者の下男に伊助と云ふあり、皇子御誕生を困みて人形筆を始めて製しければ、有馬人形筆として四方に喧傳せらる、俗に子持筆と云ふ。

溫泉染綿　一名子宮綿と云ふ、極めふ精撰したる脫脂綿を溫泉中に浸漬し、其溫氣成分の藥味が綿と同し目方になる迄浸漬消毒したるものにて、諸大醫の證明もあれは養生を重せらるゝ婦人達には缺くべからざる綿なり、血の道子宮病月經痛其他陰部の諸病に用ひて特効あり。

溫泉飴　此の飴はラヂームエマナケオンを多量に含める、有馬溫泉を原料に用ひ精製したるものにして、其

性柔くして且つ剛く、柔は齒に粘せず、剛は腸を調ふに適す、口中に入るゝ時は濃淡の味を分ち、茶菓又は進物用として需用頗る多し。

山椒味噌　は近年初めて製せしものにて風味甚だよろしく、食後口中に爽快を覺ゆ、特に其儘食料に供せらるゝを以て、庖厨の手數を用ひず、副食物として又土產物に便利なり。

黃金鹽　有馬溫泉の其効驗著るしき事は、世人の知る處なるが、年々此地に療養せらるゝ人益々多く、左れど遠隔の人、或は營業の都合にて往々其意を果さざる人尠しとせず、故に黃金鹽を製し、來浴する能はざる人の爲め需用多し、此れを有馬固形溫泉黃金鹽と云ひ、有馬溫泉より精煉したる固形物なるが、其効驗は此地に來り入浴せらるゝと同しく、諸大醫の驚歎證明せらるゝ所なり、主治効能は溫泉の條に委しくあれど、猶齒病等にも妙効ありと、用法は此黃金鹽大罐には水二石、中罐には六斗五升、小罐には三斗の水を混入して、華氏寒暖計百度位の溫泉に沸かし入浴せらるべし、大人は一月三回まで入浴し、一浴凡二十分を過こすべからず、一回の藥湯は一週以內使用の上捨て、新に又湯を拵へらるべしも溫度は普通の鹽をいる如く焙烙にていり、布につゝみ局部をあたゝむべし、其効驗著し、齒痛には齲齒等にて困る者は此鹽少量を紙に包み、痛む齒にて嚙みしめ唾液を吐出し居らるれば直に治ること不思議なりあるもの是なり。

草木

有馬草　蘭科の小草にして宿根より芽を出し、高さ一尺三四寸、四月中旬黃色の花を開く、稀には白花もあり、土地にては他國になきものゝやうに謂へり、然るに左あらず草木圖說に「キサンラン」又「キンラン」と

有馬杉　石松科に屬する常緑草にして、一莖直上し高さ五七寸、上に枝多く分ち細葉多く着き石松の特性なるものなり、漢名玉柏一名千年柏又萬年松といふ、他方にては萬年杉又草杉など云ふものなり、但高野山の萬年草とは異なれり。

梅鉢艸　六甲山に多し、虎耳草科の宿根草にして莖長さ五六寸本に葉ありて雨久草の葉に似たり、梢上に花一輪つき初秋開く、色白くかたち衣服の紋につくる梅鉢の如し、至てしほらしき花にて盆栽となし玩ぶべし。

有馬蘭　蘭科の小草にして「ウテフラン」といふものなり、山中の南溪に多し、莖の高さ五六寸三四葉莖を擁して互生す、五月下旬より六月中旬の間に紫色の花を開く、形蘭花の如くにて幽致愛すべきものなり。

有馬藤　荳科の宿根草にして漢名は胡豆「ニワフヂ」又は「イハフヂ」といふものなり、山中に自生す高さ一二尺葉は藤の如く、花もまた藤に似て小さく紅色なるものなり。

七竈　薔薇科の灌木にして葉は槐の如く、秋赤き子を多く結ぶ、此木雷を除くる故に、市中へ落雷なしと云ひ傳ふ、隨地に多くあり。

卯の花　溲疏科の灌木にして、宇豆木谷に多し、卯月の花の頃は甚だ奇麗なり。

こぶし　木蘭に屬す落葉木なり、當地には單に「コブシ」と稱ふれども尋常の辛夷と異にして一種「タムシバ」といふものなり、樹も辛夷の如く大ならず、四月頃葉未だ出でざるに先ち花を開く、五瓣白色にして香氣甚だ高し、花の形は辛夷に似たれども葉は全く異にして「クロモジ」の如し、此木愛宕山に多し、花の頃は滿山の芳香馥郁愛すべし、葉も亦揉めは良き香を發し、香水を採る原料に供するを得べし。

有馬山植物一班　明治三十六年八月田中芳男氏、愛宕山にて草木の葉を採集し自撮印せしものと云ふあり茲に掲ぐることゝす。

ワクラワ又シヤシヤンボ、　アサガラ、　リヤウブ、　ヤブムラサキ、　モチツ、ヂ又子バツ、ヂ、
アマチヤカヅラ即甘葛、　コフヂ又ヒメフヂ又ドヨウフヂ、　ヤマムラサキ又コムラサキ、　ライヨ
ケギ即ナンキンナ、カマド、　アリマコブシ即ニホヒコブシ又タムシバ、　ガクアヂサイ、　クロモヂ
アブラチヤン又ムラダチ、　子ヂキ、　イソノキ、　イタビカヅラ、　アオタゴ、　ツバキ、　メサカ
キ又ヒサカキ、　ソヨゴ又ツクラモチ、　ヤマザクラ、　イハガサ、　イマエンヂユ又ヤマエンヂユ又
クロエンヂユ、　コナラ又ハ、ソ又ホソ、　クリノキ、　ガクウツギ又コンテリギ、　ヤマウルシ、
ミツバツ、ヂ、　シノベタケ、　アカツ、ヂ、　アカイチゴ、　ナツハゼ、　シキミ大閼香と稱す、
コクマザ、、　ヤブコウヂ、　チシヤノキ又ロクロギ又エゴノキ、　ウツギ又ナガハウツギ、　タニウ
ツギ、　フシノキ又ヌルデノキ將軍木、　ケンポナシ、　ツヾラフヂ、　イヌザクラ、　ヤマハゼ、
アワイチゴ、　シラキ又コクドノクワシ、　タラノキ、　ヒラギ、　ニンヂンボク又オトコゴンセツ、
ウラジロノキ、　コアヂサイ又フシグロアヂサイ、　ツメタギ又ルリウメモドキ、　カマツカ又ナツユキ、　メウリノキ、　イヨツメ又カマツメ、　ワクラワ、　アクシバ、　オトコイチヅメ、　イモノキ
又タカノツメ、　アマツウキ又タマハ、キ又バイカウハグマ、　アトキバ、　子ヂキ、　アカメガシワ
アセボ馬醉木有毒、　ハギ、　ウラヂロガシ、　アラカシ又クロガシ、　オヲカシ又アカガシ、　サル
トリバラ山歸來と稱す。

以上山野に自生の植物中著明のものなり、又此近傍の山々は岩石より成れるも、表面に土ある處は樹木能く成長すれども、六甲山の如き其樹木を伐り盡したる處は、岩石のみにて更に土なし、故に其間に自生す

る樹木は松にもあれ、藤にもあれ、其他凡てのもの皆數十年を經たるも成長することなく、軀幹矮小にして自から屈曲し世の文人墨客が盆栽となし、愛玩する所の形を具ふるもの多し、故に土地の者又は遠國よりも來りて之を掘り採り、盆養數年にして初めて好事者の需めに應するに至ると云ふ。

河鹿　皷か瀧の流に多く住み、形青蛙に似て暗茶色なり、四月さし入より鳴く、其聲清爽にして愛すべし

漢名錦襖子といふ、井底の蛙と同樣なり。

さんしやう魚　形蝶蟒に似て腹赤からず、其身長く尾細し、相州箱根に名高きものと同類なり。

鹿　六甲山あたり及ひ近村諸山に多し、獵師は有馬町には少し、近村にて獵す、猪兎も少からず。

以上山溪の動物中著名なるものなり。

此地礦物類の產なきにあらざれども、殊更に揭ぐるに足るほどの物もなければ略して記せず、現今有野村にて銅山を採掘しつゝあり。

兎、鶯、杜宇、雉、蟬、蜩、蜂、蟋蟀、黑魚等多く山中に棲息す。

詩歌文章

有馬六景　湯泉神社寶物各六景詩歌は自筆なり

千早振神代のことは古書に遺りてこれを見ぬ人なきにしもあらぬとおくまりたること多々ありぬれば、たゞおほめくやうになむありける、又いつの頃よりか言つたへけむ、神代人の世とされども二神天浮橋に立し給ひてより、日月の運り違ふことなく、山のたゝすまひ川の流れ草木の花實も時を失はず、すべて生としいけるものいづれを理にたがふとかいはむ、たゞ所謂許々太久の罪咎を免れずに氣なきものは人の情ならんかし

しかはあれど安國しろしめす公の政あれば、貴賤ほどにつけつゝ敢て禮法を犯すものすくなく、自ら誠のすがたを失はしめ給はず、さある中にも天益人のくさ〳〵の病ひは、或は內七情に傷られ、外陰陽の和に違ひあるひは鳥獸昆蟲の災異にかゝる、是以素盞嗚尊御子大三輪神これをあはれみたまひ、其病を療るの方又其禁厭の法を定めたまふ、それが中にも攝津國有馬の出湯は奇妙なる事をよくしろしめすとてや、又の御名清之湯山主とも稱へ奉りぬ、舒明孝德の天皇有馬に遊幸つることを日本書紀に載られ、出湯の和歌も千載集に入られたれば、もとよりおぼろけの事にはなむあらじと聞ゐ侍る、されば蒼生今に至るまで咸恩賴を蒙るとや復神代人の世の殊もあらむや、既にしてのち年經るまゝに當時のすがたも跡なくなり侍りけるを、大僧正行基道をひらき、又承德元年の秋霖雨の爲めに山崩れ出湯も埋れてしれる人もなかりけるを、仁西上人といへる僧絕たる嶺にわけいりとさまからさまにこれを覓め、又古昔に復されしことなど今に傳へて上下二卷にしるしつくり、繪などありてすき〳〵見ゆ、此出湯の邊山川原などありて、四季折々のながめいづれこよなうおもふが中にも皷がたき、有明櫻、落葉山、或は功地山不二などいへるわきて興をさかすべき山川六所あり、春はわかゝへる花鳥の色音けふりわたれる木々にめて、其まゝ生茂る若葉の色すがやかに、このもかのも　涼しさ、秋は月の夕淸らにつまこふ鹿のこゑをあわれみ、蔦楓も生ぬるまゝに紅葉するけさや、かさ松の雪のみあたゝかにうち散りて花にもまがふあしたの氣色とみからみ心のゆかぬ方なく、いづれかいづれいかで言の葉の及ぶべきやうもなし、されども貴人の和歌からうたなともあらざれば其名も遠く聞ゐ侍らす出湯に集ひ來る人々たゞ花よ月よとながめすつるのみこそいとくち惜かりき。是年明和六巳丑の春ゆへありて、有馬に久しき河上余田の何某六人のともがらを、九條殿に召れて仰ごとありける、時しもあれ彼六所の

景を畫し一卷を奉りて河上維姜などみそかに語りけるは、品すぐれ位貴おはします人の詩歌はたやすからず、且おほけなき心まとひにいひよるよすかもあらざれば、永にたゆたひしとなむいひてたゝうちなげきつゝ恐み敬みねもいはずありにき、典貞も老の心のいとよわく否とばかりにねもいひはてずうけひくまゝに、一卷のうつし繪を大殿に奉り、御側に侍ふ人々に云々のことをうよとさゝめきければ、大殿もとみに聞召憐愛とおほす御心を鍾給ひ、げにや詩賦あれは見ぬ唐土の海山もまのあたりみるやうになん情にうつり、吾國の須磨明石といへども古書和歌をもなくばいかで名たゝる事かあらむ、有馬に集ひまかる諸の病る人これを見てかれをめては自ら七情の憂もとかうまきらはされん、さあれば病を療る一のたすけともならむかしとや、維姜等が私のねきことにあらず、都に遠き鄙にさへかゝるみやひあるをやといとわらゝかにうち笑給ひ人やかならすそゝぎ居たまひやむことなき一の御所をはじめ奉りときめき給ふ、御方などものし給ひ、寅の春三月廿日此事なりぬ、乃熱田の祠官尾張雄淵をして有馬三社の廣前に奉らしめたまふ、河上余田の六人の輩うや〳〵しくこれを奉じて神庫に藏め神寶とす、さあればたやすく諸人に拜み見そなはしめむこといと恐れ多しとて、嘗て同じ面なるうつしの一卷をこひにき、ねきこと復これに及ぬ、既にして大殿これを聞召て詩歌つくり、繪それ〴〵仰のまゝ臨寫しめ給ひ、雄淵典貞は此事はじめよりうけひくゆかりもあればとて、序跋をなん書しめ給ふいともかしこき仰ごとなれば敢ていなみ奉らず、典貞もとよりつたなき筆のおもてふせをわすれて、其あらましを其端に書つけ侍るものならし。

明和七庚寅年　　従六位下左京少進大中臣朝臣典貞

皷瀑松嵐　　内　　前　近衛攝政太政大臣

山まつのあらしになをもひゝくかなつゝみかたきの水のしらべは

千枝二月曙雲開。無限東風馥郁來。爲是温泉洵美地。春花偏壓異鄉催。

有明櫻春望　　道　　前　九條内大臣

切地山秋月　　雅　　重　飛鳥井大納言

鹿の音もふけ行く夜半のやまのはにすみのほる月のかけのさやけさ

落葉山夕照　　滕　　公　四辻大納言公亨卿

落葉之山名故奇。斜陽風景更堪レ思。懸知勝地常多賞。最在二丹楓落墜時一。

温泉寺晚鐘　　典仁　親王　閑院太宰帥宮

いく里の暮おどろかす聲ならず此やまでらのいりあひの鐘

有馬富士雪　　尙　　實　九條左大臣

東海芙蓉元等レ名。三峯千歳雪華清。何疑常浴温泉者。好擬南山比壽榮。

攝州有馬温湯記

林羅山

原文漢文なるを茲に譯して讀者の便とす

本邦攝州有馬郡山口莊の温泉は未だ其始を詳かにせず、舒明天皇の三年秋九月此に行幸あり、十年冬此に行幸あり、孝德天皇の三年冬十月朔此に行幸あり、十二月晦温泉の宮を出で給ひ、務古の行宮に還らせ給ふ。(務古は後に武庫と改む今の兵庫なり)然れば則ち此温泉の從り來る所已に久しきなり、舊記に云ふ聖武天皇の時、行基法師武庫郡昆陽寺より温泉に來り、一人病て山中に臥するを見て問ふて曰はく、汝何の疾病ありて此の若くなるや、病者答へて曰、湯に赴き疾を救はんと欲するも力疾て進む能はず、且つ食を絶つこと數日なり、願はくば上人我を扶けられよ、行基之れを哀み飲食を與ふ、病者曰く吾鮮魚を食はんと欲す

今食に魚なし、行基乃ち長洲の濱に至り魚を得て歸り、自ら其半を割く、病者曰能く之れを割烹して我に備へよと、基又自熟して之れを供す、病者曰上人先試に之れを嘗めよと、基即ち食するに味甚だ美なり、是に於て之れを勸む、病者臥て之を食ふ、且告て曰ふ、我黑瘍あり之を患ふ將に洗ふに湯を以てせんとす上人若し瘡瘍を舐め給はゞ痛楚少く忍ぶべきを、其體膚焦爛する事甚だしく、臭穢にして近くべからず、基忍んで舐吮す、忽ち其形變して金身となるを見る、即藥師佛の貌なり、基大に驚き拜すれば佛告けて曰く、我に温泉山あり、上人を試みんが爲めに病軀に現れ出すと言已て見へず、基感歎して止まず、即ち如法經を寫して泉底に埋め、又等身の藥師の石像を刻みて泉の湧出する處に置き、就て一字を建て藥師の像を安んず今の藥師堂は是なり、其の割く處の殘魚を以て昆陽寺の池に放つ、化して一目の金魚と爲ると云ふ、此山に三神あり、一を湯山權現と云ふは藥師なり、一に三輪大神と云ふは毘盧舍那なり、一に鹿古明神と云ふは千手大悲なり、爾來浴する者其病多く癒ゆ、蓋し佛神の加被の力に依るか、承德元年丁丑天淫雨洪水を作し、山を崩し家を溺らす、九十五年の後和州吉野の僧仁西熊野の神に詣るに一夕夢に神告けて曰ふ、攝州有馬の山中に湯あり、近歲荒廢甚だし、汝往て徑事すべしと、西曰ふ何を以て證となさんと、神曰ふ庭樹の葉に蜘蛛あり、其絲の牽く所に隨ふて赴くべしと、翌旦覺て見れば果して然り、既にして中野村二松の下に至りて蜘蛛を失ふ、西道に迷て立つ、俄かに一翁あり、西を導き山に登る、木葉を投じて曰ふ、葉の落つる處必是靈地なりと、忽ちにして翁の行く處を見ず、遂に其所に就き舊蹟を開き、湯源を浚へ寺及び十二坊舍を建て、守湯人を置きぬ、時に建久二年辛亥二月なり、享祿元年及天正四年再鬱攸の災に罹り、堂舍人屋皆烏有となる、十三年乙酉羽柴秀吉公の夫人寺院を鼎建し、封田を納めらる今の巍然たる者是なり、原ふに夫の名山岩谷其下に石硫黃あり、者發して温泉と爲り、又共に一谿に出るも半は温にして半は冷なる者あり、又

朱砂に湯泉を湧出す者あり、又潮汐の信に隨ふて沸者もあり、皆在々之れあり、中華朝鮮及本朝悉然り或は記に稱する所の呂政の時、驪山の神女が温泉に出て以て瘡疾を洗除せしが如きは、即ち山靈の爲す所もまた未だ必ずしも之れなきにあらず、凡天地の際陰陽の運、水火の交、處として之れあらざるはなし、或は蘊伏し、或は發生し、或は流行し、或は停止し、其觸激するに及んで而寒煖の氣、臭味の性、各其能毒あり、是に於て人身此れに由て疾を治するあり、疾を得るあり、此天地の五行人身の五行と相感通して二なきが故なり、辨せざるべけんや、本邦の昔此山本固より神あり、神既にあらば即温泉豈神に屬せざらんや、謂ゆる湯山の神三輪神鹿舌神是なり、是故に舒明孝德行幸の時未だ藥師佛と云ふ者あるを聞かざりしなり、大己貴神、少彦名神、我邦を闢て始めて藥術を製し、民の命を救ふ、則ち三輪の神を以て此山の主となす、固より以て其實を得たりと爲すべし、其三輪大神とは即是大己貴の謂なり、后來行基の徒佛名を假りて神跡を亂し僧居となす、怪異の巧詐を挾んで世俗を欺誣す、人々未だ之れを覺らず遂に蜀國の名山をして皆伊蒲塞桑門の窟宅となすに至らしむ、呼惜ゐかな夫盍んゞ其本に復らざるや、神は聰明正直にして一なる者なり、我豈神に媚て此言を爲さんや、神夫れ我言を歆んのみ、余去歲東武の江戸に在り、小瘍を患ひ既に故に復す、然して氣宇恒ならず、是に因て公暇を賜ひ洛に入る、今茲に來て湯泉に浴す、泉の直出て正出る者數所、清して鹹し、日夜流注ぎて窮まらず、屢々酌で常に湛へ、石を底にして以て甃み、一室板壁を間隔して一の湯と云ひ、二の湯と云ふ、其浴槽は方丈許にして甚だ熱すれば則ち筧水を注ぎ以て之れに和し、熱せず冷せずして其宜しきを得、浴する者先づ杓を手にして湯を酌み、首及び肩背に灑ぎて後に槽に入る、或は潛泳し、或は拍浮し、數婢ありて湯を盥す、或卑賤の遮なき者浴久しくして出でず、則婢呼叱して退かしむ是行や余御所房に儆て以て居る、遮るなきの者を遮りて獨第一湯に入る、同來三四人竟日情話し、書を讀み

字を寫す、或體倦めば則行て皷瀑を見、藥師堂に登り、或は地獄谷に遊び、望中の山林綠樹に對す、日を經て愈々浴すれば愈快し、亦可ならずや、聞ならく夫の華清地は諸湯に甲たりと雖も凝脂の賦傾國の汚あり、今余決して之れあらざるなり、唯風に吟し月を弄し、吾點に與みするの氣象ある亦焉幾哉、是に於てか記して以て之れを山靈に告ぐ。

皷瀑 在有馬溫泉

山噴霜雪色。淵發皷聲聲。峭壁垂氷練。險崖碎水晶。一泉奔湧漲。萬溜瀉巖鳴。誰認當々響。呼爲瀑布名。

地獄谷 右同處

村外無人境。皆云阿鼻城。日昏樵子懼。雪起怒雷轟。山鬼泣陰雨。夜猿叫月明。寥々空谷裏。魂斷杜鵑聲。

溫泉雜詠

溪聲朝暮雨。日夜洗心顏。清磬湧前寺。疎鐘雪外山。煙霞憐痼疾。木石愛頑癡。高枕臥燈下。總非天地間。

石川丈山

靜居同練若。晨起唱南謨。湧水絕喧寂。山雲非有無。半間懸磬室。十利掛瓢盂。來此成何事。浴泝風舞雩。

釋艸

暮景溫泉寺。秋風落葉山。人同流水急。鳥共白雲還。僧舍市塵裡。民家空翠間。終日溪橋上。青巒對我閑。

詠皷瀑

琴々是雷鼓。霹靂擊岩根。白鶴翔溪口。玉龍降石門。一支擘河漢。千片碎崑崙。此響何時已。長流本有源。

瀑布是何響。琴々持地轟。青空來驟雨。白日打雷更。龍級三層浪。雷門百里聲。銀河惟此處。天鼓自然鳴。

藥師堂吟

金烏沈碧落。玉兎輾鱗峋。變現瑠璃界。斡旋日月輪。七層燈火影。十二藥叉神。欲破無明病。人呼秦越人。忘鄉皆故國。有母尙思家。水激論盤若。山空對結跏。錦楓非眼纈。瑤艸豈心花。清夜耿無寐。喚童又煮茶。

遠客本多病。養身任不才。勞藜尋磵壑。破履陟崔嵬。塵世思如土。春山心未灰。溫湯若差癖。當浴日千回。

晨霞隔幾谷。何處獨分明。山色雜雪色。溪聲和雨聲。眞源人不到。忘跡世空爭。袱子包甘露。酌流自在烹。

九日溫泉下。望鄉心自勞。有莫懶追景。無菊倍思陶。野衲元疎酒。山民豈食糕。千峰萬峰上。不用更登高。

馬山即事

多病重來落葉山。夕陽樓上對屠顏。白雲綠樹皆如舊。一帶磵流廻石間。

野人性僻愛丘山。每遇峰巒便破顏。身上病非心理病。病來笑臥白雲間。

佛座巖記

落葉山下去レ橋北行。百舉武而得二一鉅巖一。冀然臨レ磵。形類二佛座一碧蘿搖々如垂二瓔珞一。余以レ杖縱橫量レ之三丈許。居民潑二膏沃一蒔二菜於上一。而其餘猶可レ容二數十人一。余浴二溫泉一日時々來登而坐焉。左顧右眄上眺下瞰而後兀然凝レ神者久矣。童警欵而仰レ霄曰。景仄矣。浴次可レ至也。余從容問レ童曰。汝睹二山之容水之態雲之色松竹之翠草木之紅一乎。是眞如二海之波瀾一也。奚童頤莫レ對。余喟然咨嗟而自語言。夫眞如海澄レ之不レ清、澮レ之不レ濁淫雨不レ溢。颱風不レ漂。湛然寂然。浩々洋々。不レ可二名狀一。强而稱レ之曰二眞如一。寓而呼之曰海而已矣若夫升而爲レ天。降而爲レ地。凝而爲レ山。流而爲レ川。動而爲二風雷一。散而爲二雨雪一。飛而爲二日月星辰一。亂而爲二雲煙霧露一。皆是眞如海之波瀾。不レ動而變。無レ爲而成者也。比下之有德者出レ言成レ章諸佛散華貫華之文。隨レ機所レ出如二雲之風變一。如二本之不變一。如二草木之雨變一。千變萬態。皆從二無心中出來一矣。夫眞如不レ如レ地耶。地有レ時震。眞如不レ傾如レ山耶。山有レ時崩。眞如不レ變如レ岩耶。岩有レ時拔而但如二此岩一有二天地一動來。地震山崩確乎不レ拔。亦於レ比二眞如一乎何有。余謂レ童曰。吾欲レ字二此岩一乃以二眞如一耶。眞如無レ形以二佛座一耶。今此山容水態雲樹之色。種々錦繡皆眞如海之波瀾。則獅子背上之說。蓮華臺中之文。而巖中所得也。契レ理會レ實名爲二佛座一乎。童竟不レ答。余亦笑而起。

佛座巖並序

淺見綱齋

馬峰之間有二一盤石一。其狀似二佛座一。上有二小峰一如レ見二光焰一。余嘗一顧而愛レ之甚遂名レ焉而爲レ記今春又遊二于此一。盤座依レ舊巍然自感而作レ詩。人雖二或不レ解一而石其點頭耶。

法界有二盤座一。群生見不レ知。獅王雖レ得レ載。力士豈能持。華藏未レ爲レ大。蘇迷猶是卑。堂々舍那佛。到レ此若二嬰兒一。

丁亥孟夏偶到二有馬一

岩垣亮鄕

鑑輿今日渡二高橋一。峰綠相圍達二四牆一。病客湯婢喧擾外。一條寬響徹二深宵一。

偶來二有馬一書以示二直達一

温泉皇代發レ源遠。自是近畿第一場。鹿舌靈神名實稱。行基縞讀藥師堂。

温泉寺

赤松鴻

石燈瑠璃色。高懸慧日明。鯨音搖レ壑冷。藥樹滿レ庭清。燈照二千年刹一。泉靈萬國名。來遊仙佛境。換レ骨一身輕。

馬山客舍

大宰純

蕭條孤館絕二逢迎一。此地唯憐泉石清。花落鳥啼春寂々。馬山風雨客中情。

馬山遇レ雨贈二逆旅主人一

高臥二西軒一客夢殘。山中永日雨漫々。蕭然旅況誰相問。唯有二主人青眼看一

落葉山

僧惠實

落葉山邊落葉催。朝攀二霜樹一上二崔嵬一。千家近在二藤蘿外一。人語時々松際來。

有馬十二景有序

馬郡湯山風景頗多。其最奇者湯泉也。其泉難レ久廼藥師如來以二方便力一指示二行基菩薩一後乃顯レ名焉。凡所二至浴一無レ不二靈驗一。余自二登卯初夏始浴一。至二丁巳季秋。指屈七番靡レ不二快然一。于是河上氏等。袖出二當山形勝二六章題一。求二代考校一。姑就二本有之名一畧爲二詮註一俾二四海聞レ風因レ湯懷レ景。因レ景賞心知二菩薩弘願一。萬禩不レ替。啣レ恩食レ德無レ不レ在レ茲。考校甫畢。逐一留題以寫二幽致一。倘有下繼至二風雅一既而賡上之不二獨流轉二勝概一。抑見二佛心無二二歲丁巳仲冬僧長日序。

溫泉寺鐘

華鯨動處逼二虛空一。十二時中報不レ同。客子回レ頭能眼聽。六根解脫證二圓通一。　黃檗　慧林

泉寺華鯨動有レ期。信如二蓮漏不二差池一。只因レ恐二彼未歸客一蹉過山中十二時。　佛國　高泉

偉哉大器重千斤。警覺二迷途一屢策勳。一擊山堂聲嘹嘹。娑婆敎躰在二音聞一。　黃檗　悅山

大口阿師鐵鑄レ身。高懸在レ簦不レ沾レ塵。圓音一控山河震。醒盡閻浮夢裡人。　釋　別傳

三神靈廟

千秋不レ懷古祠壇。神自靈兮地自安。除盡二國人多少病一。至レ今弘濟頌二湯山一。　慧林

古佛資生類二老姁一。三神衞レ法鎭二靈區一。至レ今神鑒凜如レ在。歷々難レ逃漢與レ胡。　高泉

祠門壯麗竹松青。中有二三神威旦靈一。福レ國庇レ民扶二正法一。無邊誓願等二滄溟一。　悅山

天自淸兮地自寧。冥加鎭護荷二三靈一。兒孫爪㕓居民福。福祐千秋粲二德星一。　別傳

有明櫻桃

雲煙斂盡見二嶙峋一。產出二巨櫻一莫二等倫一。花下客遊堪レ傲レ世。何須更覓二武陵春一。　慧林

馬邑名山世所レ稱。櫻花誰種倚二雲層一。花間遊客蟬聯至。不二是逃レ秦入二武陵一。　高泉

王母何年降二世間一。遺來二妙種一在二名山一。千枝花綻三春麗。上苑群芳莫二與班一。　悅山

一樹橫斜臨二古岸一。紅葩爛熳媚二春光一。只因二皷瀑驚二花睡一。銀燭無レ勢夜照レ粧。　別傳

上野野霧

詰朝霧氣黑漫レ堌。頰看桑田變似レ溟。俄頃金輪輝二界上一。始知天地本淸寧。　慧林

一座冥濛失二曉峰一。忽驚混沌未二開通一。須臾滿野淨如レ拂。應レ悟分明色是空。　高泉

濛々曉露罩二林泉一。豹隱幾能見二一邊一。忽爾天風吹散盡。靑山面目又依然。　悅山

霧橫二曠野一混二乾坤一。草木峰巒了沒レ存。頰眺少焉陽氣動。忽驚海底湧二金盆一。　別傳

三笠時雨　似大和國三笠山因名在落葉山之北

笠峰鼎峙冠二雲霄一。雨具天然永不レ凋。曠刧磨龍形愈現。名鐫二峭壁一並二南朝一。　慧林

三笠誰留化作レ山。竟年高閣白雲間。遮レ天蓋レ地全無レ漏。春雨秋霖當等閑。　高泉

三峯崛起如二三笠一。側立二空中一蓋覆レ人。無位眞人全不レ要。年來囑與主山神。　悅山

遺世何人共作レ仙。投來二三笠一白雲邊。任從山雨時々過。此物元來可レ蔽レ天。　別傳

愛宕松濤

織翠重々衞二化城一。參レ天傲レ雪不レ凋榮。俄然風起龍枝闘。滾作二波濤一撼二海聲一。　慧林

天風瑟々過二松秒一。皷作二寒濤一起二宕山一。說盡宣明妙觸法。了無二字咍落二人間一。　高泉

宕山毓レ秀氣鍾レ靈。假寒長松挿レ漢青。風撼二半空一濤韻出。石人側レ耳立須レ聽。　悅山

萬松玉立碧崔嵬。忽起二天風一浪作レ堆。思慧分明聞裡入。時人不レ用更徘徊。　別傳

懸崖皷瀑

盤礴瀉下玉玲瓏。如下伐二淵々一奏中碧空上。知得源頭來處活。管敎雙耳盡成レ聲。　慧林

蒼蜺誰劈引二漩源一。怒激高騰渴驥奔。晝夜闘々聲震レ地。幾疑躡レ足過二雷門一。　高泉

崖頭瀑皷闘逢々。山舍六時音韻通。恍似鼉鳴靑海上。又疑雷吼二碧雲中一。　悅山

雪瀑崩騰下二碧岑一。當々日々弄二淸音一。是誰聞者雙二雙耳一。勿レ負禾山一片心。　別傳

有馬富士

士嶽飛來馬郡前。精光吐出玉成巔。恍如純色玻瓈椀。捧峙長空兩處傳。　慧林

有小士峯出馬陽。美如齒舊色如粧。西公昔日如曾見。定亦賡歌播帝鄉。（備西行有富士題鳴天下）　高泉

駿河州裡頭堆白。有馬雲間髮染青。自是一名分兩体。休云大小未忘形。　悅山

富士長居東海天。何年飛到馬山前。峯頭往々紫雲現。疑有當時採藥仙。　別傳

羽東山月

何山無月不留情。寧獨茲山浪得名。想是眞人時羽化。氷輪迸出正圖明。　慧林

玉琢青巒秀且奇。氷輪照處賽峨嵋。幾番浴罷登樓望。一似眞人羽化時。　高泉

羽東山中空缺處。銀蟾露出影團々。流輝永夜無纖翳。不似洞庭湖上觀。　悅山

層巒鬟碧挿煙霞。且喜清霄景倍嘉。爲燥世人登第夢。一團桂魄噴霜花。　別傳

林溪楓葉

清流一帶載紅塵。做世堪藏洗耳人。楓葉醉霜如濯錦。依稀認作上林春。　慧林

滿林霜葉爛如霞。怪道人疑二月花。分付奚童時打掃。莫教隨水落天涯。　高泉

霜樹千章飜蜀錦。玉谿一帶布霞箋。山翁秋晚難收得。留與遊人結眼緣。　悅山

礪除霜重點秋林。灼見天工錦繡心。萎水飄風猶可賞。勝于三月落花深。　別傳

峰尾歸樵

伐殘玉樹一肩挑。緊梢芷鞋下翠嶢。動作不知辛苦力。過雲行唱太平謠。　慧林

峰尾峰高隔世塵。林源不惜桂爲薪。峰腰日暮樵翁返。疑是看棊柯爛人。　高泉

春峰尾上化春丘。伐木丁々聲不休。日暮負薪樵子返。是誰解趨買臣遊。　悅山

枯樵捨罷已殘陽。擔重肩頭下翠岡。逐隊相呼何所似。一行歸雁均雲翔。　別傳

落葉暮雪

六出漫空向晚增。如珠若玉富嶒峻。西人諺語宜三白。可下豊登此瑞徵。　慧林

日落鳥啼岳色寒。紛々六出隋雲端。天公欲富遊人眼。裝出瓊林與玉巒。　高泉

晚來天氣逼人寒。粲玉飛瓊積滿巒。涼々清光渾似畫。佳賓眼裡壯奇觀。　悅山

落葉風寒欲暮夫。霏々銀屑積山顛。須臾月出庭晴後。一望依稀晒玉蓮。　別傳

同十二景

智積院泊如

朱樓高架翠微中。二六報時聲落空。擊破無明昏睡夢。豁開心眼即圓通。（温泉寺鐘）

森々松柏幾回春。廟宇巍然彩艧新。此地中興神有力。至今綿續薦香蘋。

名高千古一株櫻。爛熳如燃映晚晴。宜矣當時風標士。花別看月到晨明。（有明櫻花者謂晨明月文選古詩云爛如晨明月）

倚閣遙望上野天。天蒸朝霧白於綿。茫々森々似湖海。只欠征帆與釣船。（上野朝霧）

秀出煙峰三笠堆。斜曛雨歇碧雲隈。惠公若昔遊斯境。必道南京飛去來。（三笠時雨）

崔嵬聳翠萬株松。捲地濤聲起宕峰。洗却人間塵垢耳。清風明月豁心胸。（愛宕松濤）

絕壁飛湍以皷名。薛々日夜作鼉鳴。一宵如入妙幢夢。擊石穿岩讀佛聲。（懸崖皷瀑）

士嶽居東又在西。屏顏眉目宛然齊。両山如比両僧貌。瞻至再三同仲哉。（有馬富士）

羽軸干霄一綠螺。峯頭雲盡上常娥。倚欄延眺寂寥晚。記得江公秋月影。（大江匡房曾有羽東山歌月和歌）

豊臣秀吉公

楓樹凋傷玉露零。滿溪紅葉照窓櫺。客亭不レ滅石崇富。砌碎ニ珊瑚一座錦屏。林溪楓葉

日斜峰尾望ニ歸樵一。線路縈廻下ニ岩巉一。暮靄蒼々圖畫裡。遏雲一唱筆何描。峰尾歸樵

葉峰崔崒眞圖畫。薄暮閣寒輕雪洒。幻出瓊山兼ニ玉樓一。方看淨白瑠璃界。落葉暮雪　山在藥師堂前隔溪

同十二景

花曰ニ在明一名稱新。樹邊道阻不レ能レ親。吟眸雪白春山曉。風送ニ清香一遠逐レ人。有明櫻遠望　宇都宮由的

北阪溪深落日幽。洗塵橋下洗塵流。人間溽暑知何處。六月山陰正遇レ秋。洗塵橋納涼　香川隣春

溫泉宮址鎭ニ風烟一。功地採レ材大化中。空谷猶看駐ニ龍駕一。老松垂蓋翠華鮮。杉谷故宮　稲尾道廸

何年仙客落ニ人間一。輕振ニ羽衣一來化レ山。躍出一輪雲似レ水。秋空掛照古今間。羽東間月　熊谷了庵

羽客何時降ニ此巔一。猶留ニ天竺一掛ニ雲邊一。暗知神物天應レ護。空翠染成亘ニ萬年一。三笠積翠　山科長安

眺望ニ上野總濛々。非レ雨非レ雲一色同。唯有ニ奇峰藏不レ得一。綠鬟高出皂羅中。上野朝霧　谷川永元

削成盤石高千尺。上有ニ峰巒一小祠一。人立虎蹲苔色厚。數峰峙起勢將レ危。愛宕巨石　原芸庵

常喜山頭翠霧晴。松風幾度送ニ華鯨一。更將ニ殷々黃昏響一。起得人間無盡情。藥師寺晚鐘　紀宗恒

暮雲擁レ樹日西淪。樵夫歸來闘負レ薪。相逐相隨高下路。知非ニ石室看レ棋人一。峰尾歸樵　服部道琢

煙樹籠レ秋風自間。時看空翠濕ニ孱顏一。霎餘猶有露光滿。染就攝西落葉山。落葉秋霧　梅園立意

瀑泉直下自喧豗。日夜琴々長听レ雷。風韻相和山月白。清流故使ニ好懷開一。鼓瀑清響　堀正樸

暮天雪霽景新鮮。山色遙聳白玉蓮。千里駿陽如レ縮レ地。雲間忽見土峯巔。富士暮雪　柏梅溪

鼓瀑

王化八州洽。無人鳴不平。瀑泉果何物。頻作ニ鼓聲一。

水屋

就看斯瀑水。何比不平徒。請思堯王日。民有ニ鼓腹娛一。

萬葉集

なけきつゝ我なくなみだ有馬山雲井たな引雨にふりきや　近衛霞山

○

しなか鳥ゐな野をゆけはありま山ゆふ霧たちぬ宿はなくして　阪上郎女

みな人の笠にぬふてふありま菅ありての後もあはんとそ思ふ　讀人しらず

おふ君のみかさにぬへる有馬菅ありつゝこれもことなき業も　人麿

有馬の湯にまかりて　同人

いさやまたつらきもしらぬ高根にてまつくる人に都をそとふ　宇治前大政大臣

ありま山すそ野のはらに風ふけは玉もふみよるこやの池水　法性寺入道前關白

珍らしきみゆきをみわの神ならはしるし有馬の出湯なるへし　按察使資賢

わたうみはるけきものをいかにして有馬の山に鹽湯出らん　源兼昌

ありま山みねの嵐に月さえてゐなのかはらにちとり鳴なり　伊嗣朝臣

とまるへき方やいつこに有馬やま宿なき野邊のゆふくれの雨　院御製

ありま山ゆうこねくれて旅ころも袖につゆちるゐなのさゝ原　前大納言俊定

くれ行はへたつる霧に有馬山ありともやとや尋ねかねまし　同人

津の國のむこの奥なるありま山ありとも見わず雲そたなひく　右兵衛督基氏

くれ行けは隔つるきりにありま山ありとも宿は尋ねかねまし　前大納言爲定

有馬やまみね行く雲に風さわてあられ落ちくるゐなの篠はら　法印定爲
神いのる花のときにやなりぬらん有馬の村にかゝるしらゆふ　光俊
ありま山時雨るゝ蜂のときは木にひとり秋しる櫨もみちかな　爲家
有馬山君かみゆきも年ふりぬたのむしるしを神も顯はせ　同人
有馬やまみねの松かせものさわてゐなのさゝ原うつら鳴くなり　順德院御製
ありまやま雲間も見ねぬ五月雨にいてゆの末も水まさりけり　俊成
あひ思ふ人をおもはぬ病ん人は何かありまの湯へも行くへき　讀人しらず
秋はつるはつかの山のさひしきにあり明の月を誰と見るらん　大江匡房
川波も打や太鼓のおと拍子鼓の瀧にあはせてそ見し　藤原光廣卿
名も高く世に聞ねたる津の國の都々みか瀧を今そうち見る　守忠
すみ濁る心はふたつ荒川の瀧見るときはたきの白糸　澤庵
ありま山花に匂はぬ雲もなし峰もふもともさくら咲ころ　飛鳥井大納言宗祇
ありま山湯に入相の鐘の音は諸病無病と聞そ尊き　忠房
なけきのみ有馬の山に出る湯のからくて世をも經る我身哉　行風
千早振神の惠は今もなを絶す有馬の出湯にそしる　源義直
珍らしき御幸を三輪の神ならん少彦那の惠をそしる　行誠
世のたからわきて出湯のかきりなき有馬の里はありあまる里　光廣
日の薪月の水にてよきころに湧や有馬の出湯なるらん

ありま山君の御幸もとしふりぬ頼むしるしを神もあらわせ　民部卿爲家
郭公三輪の神垣それならて松にしるしの一聲もかな　飛鳥井雅章
溫泉わく有馬の山の跡たれていまもしるしを三輪の神垣　深草元政
有馬山ありとも誰かしら雲のかゝる峰にや跡はうつまむ　同人
あとたれていつとし爰に有馬山杉をしるしの三輪の神垣（或本に頓阿とあれど此人に非ざるべし）　讀人しらず
音にきく鼓の瀧をうち見れはたゝ山川のなるに有ける　清原元輔
松風に鼓の音をうちそへて千代を調る谷のしら瀧　重賢
いろに出る紅葉見つゝも山の名の落葉のかねてをしまるゝ哉　正名
雲霧のすがたまがわぬ不二の嶺をあつまにのみとなにをもひけん　久米幹文
聞しよりまさりぬるかな病人にしるしありまのさとの溫泉は　政雄

竹細工

たくみにもすくなる竹を折りまけて有馬の里はかたま造れり　慶孝

有馬筆

いはて我しのふおもいのありま筆こゝろゆくまでかきみてしかな　同人

有馬山

有馬山そこついはねゆゝわきいつるこれのしほ湯は大汝少彦名の神こそはわかしたまはん、四方の國あしなね手なね、もろ〳〵のやめる人とも、馬車のりものらすも、手束杖つぎもつかすも、はる〴〵に來よりつとひて、おりかつき湯かはあみすと、大神のちはへたまへば、なねたりし手あしはたらき、なやめりし心さ　久米幹文

はやき、のり來つる車おもはす、つきゝたる杖もわすれて、いはかねのこゝしきやまを、たゝこねに越行ゝ

みれは、あやにたふとし。

つみもなくやまひもあらじ世の中にありまのみゆに身そきしつれは

今朝聞けは皷の瀧にしたまんと福は有馬の山の正月

影移る櫻の名さへ有明の日にも匂ふ山川の水

有馬山みねの松風音きゝて伊奈の篠原鶉なくなり

有馬山おろす嵐のそよきつゝ秋をも待ぬいなのさゝ原

有馬山竹葉かりしてよもすからふしも定めぬ草枕して

ほとゝきす有馬の山を君ひとりこゆと聞せはゆかましものを

こゝろある有馬の浦のうら風はわきてこのはを殘すなりけり

ありまやもおろす嵐のさひしきに霰ふるなりいなの笹原

神祭る春の時にやなりぬらむ有馬の森にかくるしらゆふ

短夜のいなのさゝ原明ぬれと影は有馬の山の端の月

初雁のうきて思ひの有馬山たつ夕霧の空に鳴なり

いつか湯に水の煙に時知らぬ山は有馬のすゑの河浪

杉谷の古巣に舍る鶯の啼くそ春のしるし成けり

ことゝはんかたもいつくに有馬山宿なき里に夕暮の雨

津の國のつゝみが瀧を來て見れは河邊にちゝやたんほゝの花

遠江守一政　行風　公衡　俊成卿女　讀人しれず　兼澄王　扁王　定家　光俊　頓阿　中務卿親王　徽書記　實仁法師　建禮門院　西行法師

花にとはいさ白雲の山の端にあり明さくら盛り成る頃

名にしるし夕霧はれて有馬山はるかにまさる秋の月影

有馬ふし麓の霧を海に見て波かと聞けは小野の松風

三日月の汐湯に移る影見れはかたわもなをる七日〳〵に

山深み紅葉の色に流れきて染こそかわれ瀧のしら糸

歸るさは雪もや降らん破笠つくろい添よ有馬小菅を

かり枕結ふ有馬の山風に夢路も遠く都隔てゝ

古郷の便り床しき風なりて枕にそよくいなの篠原

有馬山いなの小笹の一ふしも歸りかり寢の枕へたつる

有馬山青葉にましる薄紅葉花をわするゝ秋の色哉

名にしおふ出湯は添て有馬山わくかと木々のしけり行哉

出湯わく谷の影草まつもへて有馬山風春や立ち舞

わき出る惠みの底や深から無汲度ことによはひのふれは

難波江のあしのいたみを有馬なる湯に入てこそよしと成けり

われはたゝ歌の病ひの有馬なる湯へそろ〳〵足曳の山

岩さわり結ふとすれと流れてはおのれとくる瀧の白糸

松に吹風のしらへに名においてつゝみか瀧のなみに音そふ

月影も花の光は花の名の有明かけて朧夜もなし

同人　烏丸光廣卿　花山院御製　舒明天皇御製　道晃法親王　同人　直敬法親王　同人　智忠親王　良恕法親王　水無瀬氏成　長嘯子　前關白兼熙公　妙祐尼　由緣齋貞柳　本多忠郷　小笠原信濃守長勝　同人

假寢にも露の名殘は有馬山猪奈野さゝ原一夜ならねは　同人
山里は軒端つゝきに峯の松春たつ門にもとはやすなり　小堀宗甫
今宵みよ天の川浪影移す有馬の浦もほし合の空　烏丸光廣卿
有馬山峯の松風霧ふけは夕日こほるゝいなのさゝ原　大納言雅章卿
有馬山花に匂はぬ雲もなし峯も麓も櫻咲ころ　同人
色はへて咲つゝ花にありま山松の常盤も匂ふ春風　資慶卿
さそはれん花も知られて有馬山峯行雲にかゝる春風　同人
心なき雲とも見へすありま山春の名殘の花そ立そふ　八條宮
ほとゝきす三輪の神垣それならて松にしるしの一聲もかな　深草元政上人
袖とをる霜夜の風も身に絶つ猿鳴山のこからしの月　大納言俊定
山深く峯に嵐や渡るらん紅葉の橋をわたる柴人　李花集
有馬山猪なのに笹の一ふしも歸るかり寢の枕陽つる　武家百首
ありま山やま風あらく降雨にまして宿なきいなのさゝ原　拾遺國房
有馬山いなのさゝ原行くれて一夜の宿に嵐吹なり　友重
かり寢するいなの笹原ふきふしもしらてや今宵月に明さん　香重
しなか鳥猪名野ふし原飛渡る鳴の羽音もをもしろき哉　長舍
有馬山高き計りは德もなし湯あるを以て世にそ尊ふ　同人
山の原わきてあまれる泉湯やいつ入とても心地よからん　小堀一政

あかさゝぬ此湯に來る思ひ出に今一廻りいるよしも哉　遠江守
目と耳の病ひなほれる湯の山は見ると聞とも違はさりけり　同人
有馬山湯女のさゝのむ聲きけはいて其人に付さしといふ　四辻季賢卿
此度は杓も取あへ有馬山留湯の數は湯女のまに〳〵　頓阿法師
雲霧のはるゝもやかて山の端に夕殘有馬の月そ更行　同人
くれぬとも鳥のふし原ふみたてゝいな野の末を狩や往まし　梅月堂宣阿
龜の尾の山の岩根の松風に氷れと絶ぬ瀧の音哉　同人
外のちる後も櫻はありまやま深き色香の春をとゝめて　夫木集
ほとゝきすうつゝにきなけ有馬山ありしは夢かあかつきの空　伊資卿
有馬山峯の嵐に月さへていなの川原に千鳥啼なり　同人
あすかへる古郷たれか思うらんたゝまゝおしき山のにしきを　播州明石城主直綱朝臣
有馬山旅寐の床に長月の名におふ月を見るも珍らし　庭田雅親卿
彌陀とのふ法の聲々聞からにまつ霧の身の罪は消けり　藤原國房
いかはかり降雪なきはしなか鳥伊奈野柴山道迷ふらん　松岡雄淵
いにしへの御幸の後はめすらしきしるしを爰にけふ三輪の神　緒方南湫

山抱二三方一作二屏障一。水分二両派一扼二西東一。人烟六百無二農戸一。一半商家一半工。
木未炊烟起。崖頭夕日斜。過橋誰氏女。束髮挿山花。

家有佳兒待我還。歸遺何物最輕便。偶人躍出絲絲管。有馬筆名天下傳。有馬人形筆

蕭郎歸思奈難維。妾恨長於楊柳絲。千行淚濺一溪水。杖棄橋頭分手時。杖棄橋

一盤香味越天藥。喫去能爲杯酒媒。最是風流命名好。曾經貴族品題來。越天樂

和得肉羹香氣新。椒花推賞馬山珍。土盤一喫豈無感。似警人間世味辛。花山椒

滿盤黃玉似湯花。柔軟黎祁上齒牙。若使淮南王一喫。向東瀛去泛仙槎。湯花豆腐

層樓百尺枕清谿。仙女倚雲危檻西。山紫水明多媚態。金衣公子近窓啼。

忍見英雄筆墨蹤。當年盛事又難逢。十餘古刹餘三四。微雨寒烟日暮鐘。

鐵路通從浪速津。山林開墾起工頻。千金一擾豈無日。地屬投機龍斷人。

節入中元多夜涼。閭鄉人總似風狂。踏歌聲起鼓聲裡。女扮男裝男女裝。

風撼松杉寒起粟。一條小徑通谿曲。誰圖咫尺小蓬萊。有此禽蟲阿鼻獄。

養痾愛此地幽閒。春去夏來猶未還。浴後浴前無一事。虛心終日對青山。

聞說靈泉浴兩皇。煌々國史有旗章。水聲寫得鳴鸞響。終古溪山見龍光。

鳴動以來湧出多。又知溫度更加多。變災爲福山神賜。春夏秋冬浴客多。

山皆秀拔水清冷　四面相圍似畫屏。不怪溫泉痊痼疾。一區劃地地鍾靈。

記得明皇事。驪山尙宛然。溫泉唯療疾。未見作神仙。

攝北播東谿谷間。靈泉鬱沸別成寰。何須遠去求仙藥。咫尺蓬萊是馬山。

銀河百尺瀉天門。更作風雷忽斷痕。穿地飛龍空碎玉。暫鳴金鼓躍巖根。鼓瀑松嵐

採藥杖藜登翠微。斜陽映樹染吟衣。秋風偶有神仙友。落葉林間醉忘歸。落葉山名城山夕照

桐隱　依田百川　田中芳男　江馬天江　細合雛　仲素堂　辻本耕堂

塔嵐輕動梵王城。一杵蒲牢客夢驚。仙境暮鴉飛閃々　溪聲山色雨相清。泉寺晚鐘

青女粧成錦繡攬。古來功地此名殘。秋風落日尋詩客。萬里山川對月觀。功山秋月

如雲若雪掩天橫　滿眼夜光當路清。花下咏觴何用燭。春山古月有明櫻。有明櫻樹

幾層松磴帶苔青。花苑初知草木靈。浴後拜神人禱福。清風輕動廟前鈴。三神靈廟

林溪秋色勝春光。愛見山河媚夕陽。九月昊天青女力。般々織出錦衣裳。林溪楓葉

丁々伐木對殘暉。落葉和烟與鳥飛。山靜樵歌傳谷口。青牛時帶白雲歸。峰尾歸樵

重疊翠巒雲作鬟。仙人栖老自清閑。晒風沐雨幾千歲。不破不張三笠山。三笠雨雲

有馬溫泉十二坊詩

鬱沸靈泉甲我州。滿山風色好春秋。白雲深處多仙客。太古橋邊最北樓。北之坊稱兵衛

樓面浴場阡陌清。美人移榻自多情。銀波激灩甃池畔。細聽宵々襖子聲。池之坊

三方林峯一方寬。十里清溪響碧湍。日暮樓々裂風景。澡泉人倚二階欄。二階坊

紅袴白衣空束裝。當年風俗憶先王。誰家豪客千金宴。美女香車下大坊。下大坊

樓閣臨流好納涼。棋仙日々笑談香。豐公三百年前趾。遺澤猶存御所坊。御所坊

一簇蒸雲罩樹青。古來不變是灰形。尼崎坊近清涼院。山色溪聲和誦經。尼崎坊

靈液萬年無盡藏。聖僧佳號夙緣名。從來不問途遐邇。浴後人登此奥坊。奥之坊

溪風山雨屋西東。隔斷塵埃曲徑通。日暮殘雪晴吐月。高樓聳在半天中。中之坊

馬山仙境石溪鳴。美女當門開送迎。廛廓東西來浴便。溫泉塲近路縱橫。橫之坊

十里薰風自動車。幾回往復是繁華。深泉人又觀光客。疇昔王侯憩息家。角坊舊時休所

東風何處訪花神。山雨欲來泉石新。功德無邊稱廣大。禰宜同浴鐵門人。禰宜屋

古館蕭條寂不譁。仙鄉一路月光斜。青山未老長依舊。霜雪千年若狹家。若狹屋

層樓高聳拔松梢。一道皷溪潭作坳。常有逍遙麋鹿友。經營泉石不誅茅。茅之坊

有馬靈泉湧出長。浴餘探勝醉高堂。先王遺澤豐公跡。明月麗花俱帶光。保勝會倶樂部

十二坊稱十二神。白衣紅袴侍高人。不看敦朴由那女。山水繁華鐵路新。有馬所見

次辻本君有馬溫泉十二坊詩並詩韻　　園田松園

靈泉自古冠蜻州。紅葉白雲春又秋。橋畔逍遙幾停杖。依稀天樂出仙樓。北之坊

浣紗水滑石泉清。雲雨巫山太有情。一曲霓裳人不見。珊々佩玉步虛聲。池之坊

山秀溪深地稍寬。流泉一道響奔湍。佳人浴罷嬌相倚。丁字簾前亞字欄。二階坊

白馬金鞍解束裝。驪山今尙記明王。嬌花一朶含微笑。美女當壚坐酒坊。下大坊

擔馬嘶風風送涼。隣樓笑語粉脂香。豪華一代幻耶夢。空剩豐公留浴場。御所坊

嵐光一片入簾青。姑託溪山影與形。淨域豈其煩惱境。殘僧朝暮讀華經。尼崎坊

鬱沸溫泉無盡藏。靈區山谷別成鄉。聖僧一自留遺蹟。浴客于今訪奥坊。奥之坊

一川暝色水西東。咫尺仙源有徑通。銀燭珠簾秋不鎖。玉琴聲在畫樓中。中之坊

鏘然如磬石泉鳴。繚繞青山任送迎。浴客四時來養病。一區阡陌路縱橫。横之坊

食有鮮魚出有車。山間獨占小繁華。偏歡昌代多遺澤。來宿王侯憩息家。角坊

靈泉醫病妙如神。況有春秋景物新。欲畫不知躬入畫。白衣瀟洒倚樓人。禰宜屋

地占仙鄉畫不譁。青山一路入雲斜。依然嵐色當窓綠。巨館今猶說舊家。若狹屋

居然傑閣聳雲梢。崖下清潭碧作坳。麋鹿馴人無敢避。樹林深處簇芳茅。茅之坊

十二坊中各祭神。侍來紅袴白衣人。千年不變佳風景。山自深兮水自新。馬山所見

有馬溫泉雜詩　　重野成齋

舒皇昔幸此。歸來誕皇子。靈液分一滴。注入天潢裏。

天有厚生德。人要窮理精。毒水今爲藥。徒存地獄名。地獄谷

豐公築臺處。秋草碧芊綿。點蒼人不見。爐灰山巍然。有馬雜詩

垂柳陰中月半梳。釣童歸到帶溪魚。快心一段無由語。浴後風床喚得初。有馬雜詠　笠東外史

山樓睡不成。獨坐養幽情。風花松濤絕。聞唯落葉聲。　藤江石齋

老雲松月獨幽閒。三百年來瑞寶山。流水栖鴉園換主。石棋盤蝕尙未刪。瑞寶寺有豐公遺愛石碁盤　辻本耕堂

到湯山　　黃蘚月潭

合沓群峰裡。別開一洞天。鶯花方盛鬧。人馬競駢闐。穿石靈湯湧。傍崖複屋連。風光何處似。駱谷在秦川。

犖确攀登馬阜巔。岩根迸出兩湯泉。貴公賤隸或來浴。宿症沈痾盡瀉痊。驪水却嫌傾國汚。杖林同感我生緣。

韙哉古佛彰靈處。慈澤汪洋潤大千。

活々常流石罅泉。抱痾衆客浴爭先。來時羸弱乘輿過。去日康彊徒步旋。基老慈波沙界潤。仁公德澤古今

傳。在多幸得探奇勝。丘壑形骸一濯鮮。

琉璃界內大醫王。常喜嶂頭坐道場。十二夜叉圍寶座。三千刹海放毫光。靈湯迸地流無竭。藥樹成林茂

愈芳。直待群生塵垢盡。方知濁世罷津梁。到溫泉寺謁藥師如來

堂前灌木鬱憧列。檻外長川德水流。觸目便成清泰境。何須佗土苦尋求。善福寺

半是山谷半是鄽。見聞總不ㇾ礙二安禪一。市聲撩亂溪聲雜。人影紛紜雲影連。客館偶成

神人手裏一枝葉。落在二峯前一認二聖泉一。萬古奇巒名不ㇾ朽。幾多騷客入二吟篇一。落葉山

憂玉筠千个。洗雲水一豁。輞莊何可ㇾ羨。即此足二幽棲一。

我家住在二大宕麓一。萬仞崔嵬恒寓目。偶來作ㇾ客馬山中。喜見小宕秀且黯。天霽呼ㇾ筇便一登。螺徑躡ㇾ雲盤曲

曲。藏王行宮倚二絶巔一。九華聖境超二塵俗一。怪石奇巖不ㇾ厭ㇾ看。風穿古松聲謖々。臨崖俯瞰眼界寬。纖穠無遺

列畫軸。群嶂包羅龍虎形。二水交流鴨頭綠。雞犬相聞千井煙。竹醉花燃連林谷。春晴急客喜躋攀。行々魚貫

相隨逐。忽聽華鯨報二夕陽一。下ㇾ山又入暄波浴。愛宕山

郭外尋ㇾ僧到。寶林通二一溪一。無ㇾ塵花滿ㇾ砌。有ㇾ顛水流ㇾ谿。堂奉二補陀像一。掛懸一木老題一。可ㇾ中離二闤闠一。永

好樂二禪樓一。瑞寶寺

絶巔雲根古。苔蝕暴一烟霞一。因其居二聖境一。名之曰二九華一。問ㇾ巖々無ㇾ語。問ㇾ人人曰ㇾ嘉。萬世不二移動一。靜鎮

藏王家。題九華巖俗天狗岩

三神鼎護一陽岑。黎庶欽崇古到ㇾ今。降福禱ㇾ災多感應。軒知內秘佛陀心。三神廟

祠前一樹檉杉碧。霜幹參天千百尺。聞說頓阿曾入ㇾ歌。永年不ㇾ值斧斤厄。頓阿杉　耕堂曰往年杉古枯今已無

古殿雲封倚二翠岑一。鳥啼花笑晝沈々。入門便見清涼額。遊者須ㇾ消熱惱心。清涼院

瀑流百尺掛二危巒一。噬皷騰々聽者歡。甚恨近來雷雨擊。崖崩沙擁作二平灘一。皷瀑

皷瀑崖外一樹櫻。賽他京嶺萬株榮。我來春晏芳零落。葉庭倉庚叫數聲　有明櫻過已落花

坡仙覓炎液。曾入白水巒。有岩名佛蹟。雲裏勢巉屼。此處有佛座。浴客恣遊觀。時々祥光現。凡眼那得ㇾ看。

佛座巖

十二樓臺鬱二半天一。洞房春深浴二靈泉一。溪聲繞ㇾ枕夜疑ㇾ雨。岳色當ㇾ窓曉帶ㇾ烟。神女虛傳謂二白帝一。聖僧曾得

遇二全偈一。蓬嶠雲物成二眞氣一。好是壽觴獻二萬年一。湯山即事元文三年　屈正超

豐公築館事千年。開士遺蹤亦杳然。惟是金鑾駐驊處。長留二餘澤一在二靈泉一。有馬雜詠　石橋雲來

書棟彫欄罩二暮烟一。溫湯塲似木蘭船。芙蓉出水々如ㇾ錦。越甑吳娃浴二一泉一。

撾休二玉皷一理一瑤箏一。樹影溪窓月二更一。不二是尋常吠蛙種一。灰形山外一川聲。河鹿

色澤鮮明稱二絶儁一。製依影意最風流。名媛好事堪二追想一。染出林楓葉々秋。有馬染

莫二是螢中縮二天地一。有人管裡自藏ㇾ形。一從二皇子傳二情話一。付與二垂錐一留典型一。人形奪

囑天囑來莖幾莖。辛甘不ㇾ用試二題評一。一番唱出越天樂。已有二風流若二廣卿一。越天樂

有馬山椒世所ㇾ推。曾蒙褒賞又奇哉。尙知調理安排好。辛味却爲二甘味一來。花山椒

剛柔異體各凝ㇾ妝。厚密濕饐和二胃腸一。不ㇾ係二美人男子別一。每ㇾ親二陳席一有二餘香一。題有馬溫泉飴　辻本耕堂

蒸ㇾ豆和ㇾ鹽風味成。山椒玉粒囑來清。珍羞曾不ㇾ勞二厨婦一。好配二辛甘一太有ㇾ情。題山椒味噌

日月同形又似ㇾ球。炭酸製餅鬻二諸州一。馬山珍味勝二仙藥一。已識人間萬戶侯。題炭酸製餅

湯山雜咏

伊勢　小淞

貴尊遺跡世欽崇。大己貴尊創湯有鎭座石　脈々靈泉萬古同。輦路曾聞通二武庫一。武庫即兵庫、舒明孝德二帝行幸由此路、俗稱天皇越　石槽今見說二豐公一。湯槽疊石公時所造

起樓面面臨二岩岫一。分水家家引二竹筒一。我有二煙霞爲二痼疾一。好將二一浴試二神功一。

浴罷欄干坐二夕曛一。勸杯湯女語殷勤。蓉峰遠影倚二天聳一。北位山狀似富岳者稱有馬富士　皷瀑餘聲轟ㇾ地聞。瀑在南山下流繞市街　雨足松林秋

孕ㇾ蕈。氣蒸泉檻午生ㇾ雲。人言巖谷多奇絶。健筆誰能繼二柳文一。

神靈數字石標嵌。日本第一神靈泉清人江大楣所題　沸沸溫湯帶海鹹。粉壁連山千戶市。翠雲藏寺十圍杉。題ㇾ詩時試貍毛筆。土人能遺筆

汲レ水或尋龜尾巖。岩下有清泉 商擔有レ魚鮮且美。淹留三日足ニ貪饞一。

有明櫻春望　藤原爲紀

春のよもなかめはよろしなにしおふありあけさくらさかりなるころ

落葉やま木々のわかはに雲霧をすゝしくてらす夕日かけかな　落葉山夕照

たつ霧はふもとにきねてありま山峯々さやけき秋の夜の月　功地山秋月有

ゆふまくれふる雪はれてさやけきはありまのふしのすかたなりけり　富馬士暮雪

たかねより落るつゝみの瀧つせにしらべを添へて松風とふく　鼓瀑松濤

きくことにあはれそ深き溫泉寺木の間もりくる夕暮のかね　溫泉寺晩鐘

有馬山湯泉記　屈正超

上古天神鴻濛之代。二尊實主ニ中洲一。其製ニ陰陽一憫レ世憂レ民之心不レ能ニ自已一。乃醫藥湯泉所レ繇命也。然即湯泉之設亦遐哉。邇人皇氏舒明孝德二帝嘗幸ニ于攝州有馬山湯泉一。有レ詔曰。此山有レ功。因名レ山爲ニ功地一。自レ此以降。凡諸州湯泉地志以載ニ國風一以詠不レ遑ニ枚舉一焉。至ニ若聖僧逢レ佛高師徵レ夢靈異寺驗神貺一昭答舊史之錄不レ可ニ復誣一焉。豈是契有レ因而顯有レ時與。顧失丹石之精硫黃之氣。神泉靈液。毓秀鍾美。蒸騰流注。不能以不出湯泉。延及山川草木莫ニ視不一明媚光潤一矣。且馬山爲レ境也。林巒蒼蔚四圍。二川環レ邑分流街坊湫溢。層樓複閣人烟蒙會。桂玉魚鹽。四方之民與病輻輳。亦楚越之所邂逅良奴之所雜ニ蹈也一。元曆中官置守。湯戶十二所。今所レ謂十二坊相傳皆平族之胤也。而湯泉所レ涌甃石爲レ槽覆ニ八瓦室一。且令ニ村女一監護ニ浴者一。先レ前不闌入也。直北一峰隱然ニ于雲霧之間一者謂ニ之不盡一箕狀惟背也。東望則飛甍石梯堂構崇峻臨ニ于愛巷一者醫王殿也。南行里許漸入ニ佳境一花木幽邃。峭壁斷崖。岩陰飛流。姻々蓼々響如應鼓節者鼓瀑也。愛宕之噴豁。落葉之陰森擧是爲ニ一邑甲一。稱ニ其他諸勝一見ニ諸圖一者。前述已具不ニ復贅附一焉。今茲戊午之春。我藝陽侯方朝ニ東京一。扞ニ駕於驪山一。以就ニ湯醫一。浴罷則搜索ニ名勝一。登陟相半。以縱レ所レ之吟咏彌レ日頗寄ニ物外之想一。扈レ駕者亦以有レ命。述ニ歌詩若干首一。余與焉。且使ニ余紀遊一。以貽ニ諸後一。而余也叨陪ニ平臺之末列一。因非ニ授簡之材一。但以承ニ乏文學故一。略錄ニ其勝概一云爾。元文三年戊午春三月。藝府儒學。平安。屈正超。幸命謹記。

有馬溫泉記

寬永四年秋九月。將レ浴ニ有馬溫泉一。步自ニ洛陽一至ニ淀城一。城主越中權守松平定綱艤レ舟祗待甚渥。乘レ舟沿レ河而曉天達ニ于尼崎一。城主戶田左門氏懇開ニ別墅一。招レ我金膾玉齏盡ニ西南佳味一矣。茗談既了日之中傳レ驛昏黃至ニ于有馬一矣。成瀨隼人正房先レ我三日與共居。與共食。與共浴。皮膚和潤血脉通暢。藹然如ニ艶陽之行ニ大虛一矣。洞然似ニ流水之洗ニ汚穢一矣。數日之間精神渙發沈痾如レ脫。於レ是登覽縱目四面皆山也。天日常少而陰雨常多。攀ニ峰頂一逍遙。則山鳴谷應極ニ源泉徜徉一。則水清石顯彼崖嵬也。我馬踟躕而不レ得レ前其岑蔚也。群鳥頡頏而不レ報レ枝怪松之偃蹇而臥ニ雲壑一也。訝ニ蒼虬之屈蟠一。霜楓之赭然而映ニ夕陽一也。疑ニ丹鳳之翔集一。志倦則暫憩ニ樹下一。體疲則跪坐ニ石上一。如レ遊ニ廣漠之野一。似レ入ニ無人之境一。世慮既忘閑眠任レ意。長噓一聲欠伸而起。于レ時有ニ一丈人一。忽然而來。掛ニ巾于石壁一。問レ之曰。子非ニ所レ謂正意者一耶。曰然。曰吾久聞ニ子之名一。而未レ見ニ其面一。聞ニ其言一。而未レ修ニ其交一。子來前吾與ニ子言曰。却未レ知ニ丈人一。丈人何以知レ我哉曰。子不レ知レ吾焉知レ吾。所以レ知レ子之者。夫名者實之賓也。吾知レ子久矣。清爲レ我話ニ溫湯之來歷功能一矣。（中略千六百字）夫湯之溫也。猶ニ能爛ニ猪羊一。熟ニ雞子一。況於レ火乎。曰嘻何丈人之見之晚也。姑以レ所レ知諭レ之日非ニ眞火一耶。能照ニ萬物一而不レ焚。灼以陽燧取レ之則成レ用。富士淺間之烟光靜則草木黑焦。而不レ滅ニ種類一。有時而動則金石流爍矣。此外山川之靈區。嶋嶼之絕境。壺燈夜見豈非ニ寒火一耶。室八島之烟豈非ニ澤中之陽焰一耶。北越之井油水也。

燃之則不異。芝麻近州之宿藻土已焚之則殆同枯。紫金戛石則生レ火。本摩木則生レ火。金木水土互爲二主用一。五行相生相克循環不レ已。湯根陰陰根陽。物理之常也。何怪之有。丈人唯々而退。吾暫欲下與レ之言不レ知中其還レ客上與二正房一語焉。土人在レ傍請レ予令レ書二本末一於レ是乎記。

昆陽醫官法眼洛澁杏庵正意誌

攝北温泉記終

跋

余聞遠者莫矣古者莫矣結繩之紀蝌蚪之文永永無窮於是乎始有書契文籍寧詳然而爲悠悠冥冥者甚稀今夏趙子有馬著攝北温泉誌所以有馬寶塚武田庵名湯東場及高倉子池田之諸名儒一日携

兵庫縣有馬郡長　正六位　森茂君跋

東海道東海道子題了言余亦觀
之流連電車之所通道途之遠
近險夷山川樹石及古今之變
遷等凡所目睹足跡或微之古
史或探口碑傳信而巨細不漏雅俗
共擇所見者一切錄之而其文
平易詳密使讀者坐有感慨

兵庫縣有馬郡長　正六位　森茂君跋

而古之懷抱可謂好著矣余亦
於有馬郡二年于茲常念己屬
之地最古而屯名遠顯雖然不
彌屯地者多唯己故鐵道模賈
郡之中央而與東京之於西北以
開使爲今有馬鐵道土木工興
更己此著而發揮隱微彰明

兵庫縣有馬郡長　正六位　森茂君跋

兵庫縣有馬郡長　正六位　森茂君跋

無素以跋介於天下若夫川邊
豐饒之沽郡跋鉄路縱橫來
周頻便只惜探索吾古可
憑之書此著一出而山河之靈
以可發揚光輝記一言以為跋
大正三年良月
有馬郡長　森茂

跋攝北温泉誌後

有馬温泉湧出其天地悠久矣此地上古進步發達
一區而今日文明之機運未開殊地僻而途險夷交
通之便頗難矣故世人知有馬之名而不蹈其地者為
多爲然往昔貴賓丈人之往來不勘隨而史蹟口
碑亦頗多雖然積歲累月將歸湮滅余愁之
已久矣今夏耕堂辻本君遊于我有馬著攝北温泉

兵庫縣有馬郡有馬町長　正八位　有井武之介君跋

地獄錄以三田佳丹池田附近ニ名勝甚引證該博文藻豊富使讀者有脫塵垢而濯靈泉之想其効果豊啻治療養軀乎有馬鐵道將竣功而此書已成矣攝北汽電之沿線更加一段ニ光彩豈獨有馬ニ山河已哉

大正甲寅十月　有馬町長　有井武之介

有馬保勝會趣意書及會則待遇規程

有馬保勝會趣意書

有馬は神代の昔大巳貴命、少彦名命の二神降臨して溫泉を開き給ひ上は舒明孝德兩帝の行幸ましましより其名殊に著しく下は乘庶に到るまて來りて病を療し鬱を散し元氣を養ふ其効驗の驗著なること多言を要せがるなり、殊に去る三十二年鳴動の結果として從來遺憾を鳴らしたる溫度を增し湧出の量も多く從て清澄となり嚴冬尙寒きを知らす實に完全なる溫泉となれり、當時學士の說に依れば敢て憂憂すべきに足らず、宜なる哉鳴動は既に終息し毫も災害なきを得たり、而して近年鐵道の布設ありしより倍便宜を得たるのみならず此地有馬鐵道開通の擧も已に成り、此地天然の風致に富み春は百花の妍を競ひ皷瀑愛宕の松濤に和し涼風颯々として夏熱を祓ひ四周の風光燦然として秋錦愛すへく風露爽にして氷雪潔し、四時に觀を改め心目を樂ましむるの資文人墨客の吟咏を恣にす、加之天然炭酸水は涓々として千秋に流る、盛夏來つて暑を避くる者年を逐ふて益多く蓋し滯在の長き浴餘徒然の嫌ひなき能はず、此に於てか有馬保勝會を起し先づ有馬十二景の一たる溫泉塲附近の愛宕山を遊園に造營し花卉を增殖し博物館を建設し博く古今の物品を陳列して參考に備へ殖產興業の一端に供し又倶樂部を築造して諸般の設備を完ふし優遊和樂の中に交誼を溫めしめ漸次他の名勝舊蹟を保存せんとす大方の諸彦翼賛あらんことを請ふと云爾

有馬保勝會

總裁從二位男爵　九鬼　隆一　　會長從三位　田中　芳男　　副會長正七位　武間　謙

有馬保勝會々則

第一條　本會は有馬保勝會と稱し其事務所を兵庫縣有馬郡有馬町に置く

第二條　本會は有馬溫泉塲附近の名勝舊蹟を保存し且遊園を開き博物館及倶樂部を建設し以て人智の啓發

と浴客の娯樂を圖るを目的とす

第三條　本會の目的を翼賛し金員又は物品を寄附する者は何人たりとも會員たる事を得

第四條　會員を分つて左の三種とし各會員に徽章を交附す

一　正會員金五圓以上を寄附したるもの

二　特別會員金參拾圓以上を寄附したるもの又は本會に對し特に功勞あるもの

三　名譽會員本會の推薦したるもの　以上會員の待遇は別に之れを定む

第五條　本會の旨趣を翼賛し金壹圓以上五圓未滿を寄附したるものを賛助員とす

第六條　會員は隨時博物館及倶樂部に入ることを得會員外に於て博物館及倶樂部に入らんとする者には入場料を徴す

第七條　本會は貴顯の方を奉戴して總裁とす總裁は本會全般を總裁するものとす

第八條　本會に左の役員を置く

一會長　一名　一副會長　一名　一幹事　若干名

第九條　會長は特に名譽ある人を推戴し副會長は有馬郡在住の人を推擧す

會長は會務を總理し副會長は會長を補佐し又は代理す

第十條　幹事は會長に於て之を囑託し左の事務を分掌せしむ

第一課　遊園及博物館に關する件　第二課　會計用度及財産管理に關する件　第三課　以上二課に屬する庶務に關する件

第十一條　會長の指名を以て評議員若干名を置き本會に關する重要の事件を評議せしむ

第十二條　第二條の施設に就き會長の見込に由り特に若干の委員を置く事を得

第十三條　評議員會及役員會は會長の見込に由り便宜之れを開設す

第十四條　金員又は物品の收入支出は明細に之を帳簿に記載し必其證據書類を存置するものとす

第十五條　現金は總て確實なる銀行に預け入るゝものとす

第十六條　毎年三月迄に前年中の事務及會計の要領を正會員以上に報告するものとす

第十七條　本會事業の施行上必要の規程は別に之をを定む

兵庫縣有馬郡有馬町

有馬保勝會

箕面有馬電氣軌道會社

乗車賃金表

普通乗車券

◎往復割引乗車券

區間	賃金
區内	六錢
一區	十錢
二區	十八錢
三區	二十八錢
四區	三十八錢

外通行税金一錢（通用二日間）

全線どこでも下車御隨意

全線 回遊乗車券

金五十一錢（通行税とも）

通用二日間

◎回數乗車券

種類／區數	普通回數券	區内回數券
二十區分	九十錢	五十五錢
四十區分	一圓七錢	一圓十錢
六十區分	二圓四十錢	一圓五十五錢

外通行税一冊に付金五錢

○普通回數一區とは普通乗車賃金表中金五錢の區間、區内回數一區とは普通乗車賃金表中金錢の區間に御座候

◎團体乗車券

人員／種別	普通團体	小學生徒團体
片道五十人以上	普通賃金ヨリ二割引	普通賃金ヨリ五割引
同百人以上	同二割五分引	同五割引
同二百人以上	同三割引	同五割引
同三百人以上	同三割五分引	同五割引
同五百人以上	同四割引	同五割引

外通行税一團体に付金五錢

◎定期乗車券

期間／區間	一區間 普通	一區間 學生	二區間 普通	二區間 學生	三區間 普通	三區間 學生	四區間 普通	四區間 學生
一ヶ月	二、一〇	一、八〇	三、九〇	三、三〇	四、九五	四、五〇	六、〇〇	五、四〇
三ヶ月	五、四〇	四、五〇	九、九〇	八、一〇	一二、一五	一〇、八〇	一四、四〇	一二、六〇
六ヶ月	九、〇〇	七、二〇	一六、二〇	一二、六〇	一八、九〇	一六、二〇	二一、六〇	一八、〇〇
一ヶ年	一二、八〇	一〇、九五	二一、九〇	一八、一五	二七、四〇	二〇、〇〇	二九、二〇	二二、〇〇

生瀬村へ三里　人力車賃金六拾錢
山口村へ一里十一町　人力車賃金二拾錢
寶塚町へ三里十一町　人力車賃金七拾錢
住吉へ三里半　駕籠賃金一圓五拾錢

有馬町ヨリ里程及ビ車賃金表

三田町へ三里　人力車賃金五拾錢
船坂村へ一里十二町　人力車賃金二拾錢
神戸市へ五里半　人力車賃金一圓二拾錢

○大阪、三田間

	列車番號	福知山行	新舞鶴大社行	鳥取新舞鶴行	新舞鶴行	哩程	賃金 二等	賃金 三等
下り								
大阪發		▲辨當	前 六、〇〇	前○ 一一、五五	後○ 六、三三	大阪より		
尼ヶ崎發		—	—	—	—	—	—	—
金樂寺發		—	—	—	—	—	—	—
神崎發		▲辨當	六、一五	一二、一二	六、五〇	四・六	一二	八
塚口發		—	—	—	—	六・一	一五	一〇
伊丹發		—	六、二六	一二、二四	七、〇一	八・一	二一	一四
池田着		—	六、三四	一二、三四	七、〇九	一一・五	二九	一九
池田發		—	六、三九	一二、四二	七、一四			
中山發		—	六、四七	一二、九二	七、二二	一三・六	三五	二三
寶塚發		—	六、五四	一、〇〇	七、二九	一五・六	三九	二六
惣川發		—	—	—	—	一六・一	四一	二七
生瀬發		▲辨當	七、〇一	一、〇八	七、三五	一六・八	四二	二八
武田尾發		—	七、一六	一、二四	七、五一	二〇・八	五三	三五
道場發		—	七、二八	一、三七	八、〇三	二四・四	六二	四一
三田着		—	七、三五	一、四四	八、一〇	二六・六	六六	四四

大正三年十二月二十七日印刷
大正四年一月一日發行

著作人　三重縣飯南郡伊勢寺村大字野村十三番屋敷　辻本清藏

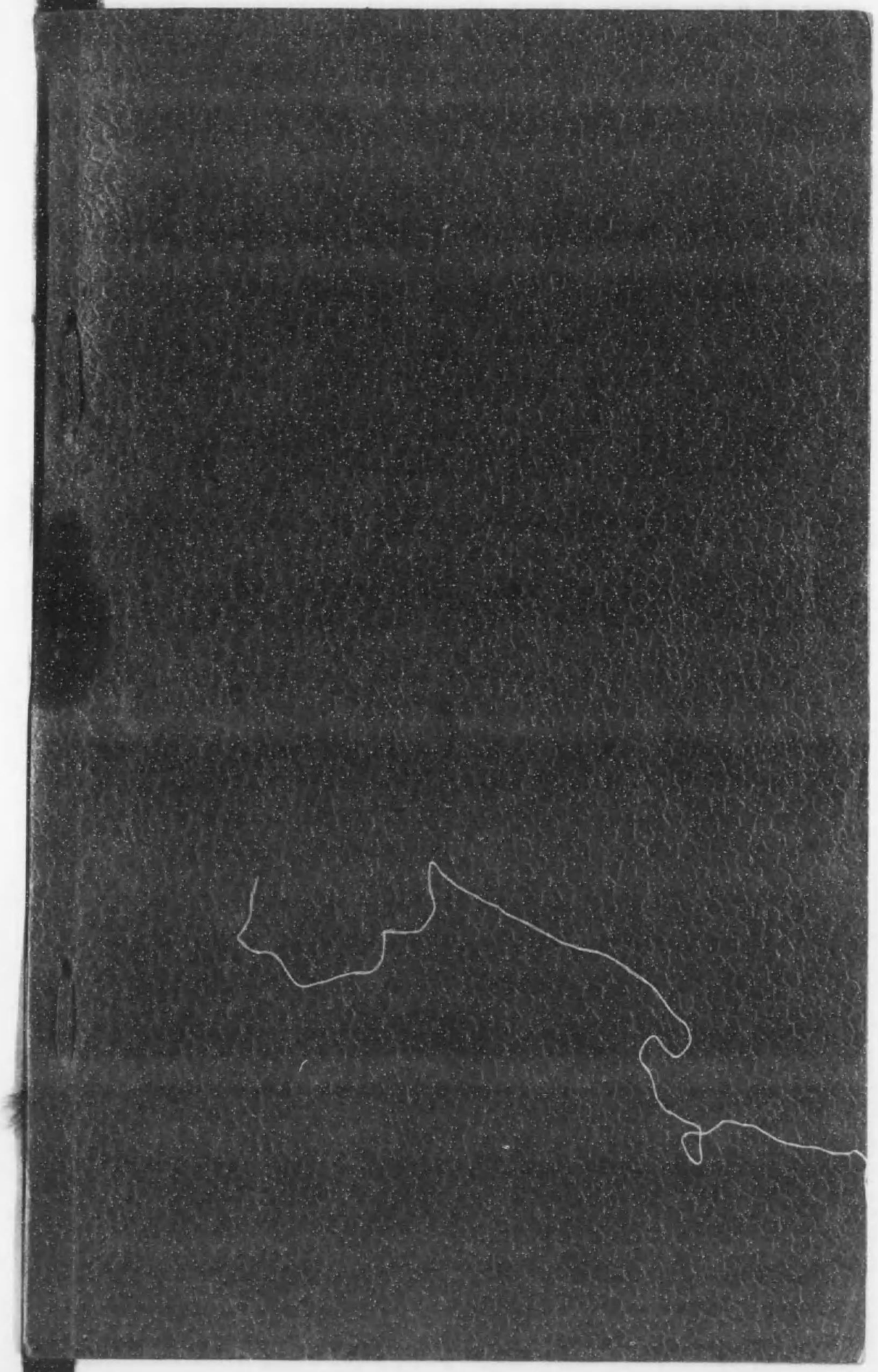
發行人　大阪市東區內淡路町一丁目三十一番地　岡本省三

印刷人　大阪市東區船越町二丁目三十番地　渡部醇

印刷所　大阪市東區內淡路町一丁目三十一番地　大阪活版印刷所

定價金貳拾五錢

不許複製

發行所　大阪市東區內淡路町一丁目三十一番地　大阪活版印刷所　電話東八八〇番

終